平安・鎌倉時代における「和ス」の意味用法

――「ワス」と「クワス」を比較して――

柚木靖史

目次

一　はじめに
二　古辞書の記述から
三　国語文における「和ス」の意味用法
四　漢文（訓点資料）における「和ス」の意味用法
五　久遠寺蔵『本朝文粋』における「和」字の訓読
六　おわりに

一　はじめに

漢語の中には、一語に複数の読み方が併存し、読みの違いによって意味も異なるとされるものがある。本稿で取り上げる一字漢語サ変動詞「和ス」も、そのうちの一つである。「和ス」には「クワス」と読まれる場合と「ワス」と読まれる場合とがあり、前者は漢音読、後者は呉音読によるもののようである。

さて、一つの漢語に複数の読みが存する場合、それらが互いにどのような関係にあるのかということについては、既

に、この観点から論じられた御論考も存するが[1]、尚、個々の語についての検討が進められて行く必要があろう。本稿は、「和ス」という漢語サ変動詞に焦点を当て、「クワス」と「ワス」に意味の違いが認められるかどうかということを、国語文と漢文（訓点資料）との両面から考察していこうとするものである。国語文を対象とした場合には、我が国古来の文章表現において「クワス」と「ワス」がどのように使い分けられていたのかということが問題になるであろうし、漢文特に訓点資料を対象とした場合には、「和」を「クワス」「ワス」のいずれに読んだかということ、さらに、そこに読み分けの基準が存していたのかどうかということが問題になるであろう。また、「和」には「ヤハラグ」（四段・下二段）という和語動詞で読まれる場合もあるので、そもそもどのような場合にサ変動詞「和ス」と読まれるのかということも問題になるであろう。

尚、この論文では、「和」の読み方を問題にする場合につき「クワス」「ワス」と片仮名表記することとし、両者を含めて論じるときは「和ス」と表記することとする。

二　古辞書の記述から

まず、古辞書を資料として、「和ス」という漢語サ変動詞が我が国において、どのように捉えられ、説明されてきたかということを見ておくことにしたい。

和ワス声相応也　（前田本色葉字類抄　上巻　辞字88丁裏6行目）

和ワス声相応　（印度本節用集　弘治二年本　72・3）

和ワス声相応也　（同右　両足院本　78・6）

和わす　声相応スル也詩ノ之和ー等也　（恵空編節用集大全　態芸門　223・5）

これらの用例をみてまず言えることは、サ変動詞として掲載されているのは「ワス」であるという点である。節用集

などに「クワス」がなぜ掲載されていないのか、考えてみなければならない問題であろう。さらに、「ワス」の意味は、「声相応也」として考えられていたということも古辞書の記述から伺えようかと思う。「声相応也」とは、「相手の和歌などに相応じて返歌をすること」という意味を表したものと思われる。「ワス」の意味としては、「穏やかになる」「混じり合う」等、この他にもいくつか考えられ、多義語の様相を呈しているが[2]、そのなかで、なぜ「声相応也」という意味だけが掲載されているのか、これも考えてみなければならない問題であろう。

さて、江戸時代に成立した辞書にも、節用集等と同じような意味が記されているので、ここに記しておく。

わす　和す　万葉ニ和シケル時其歌ノ返歌ヲヨム也。袋草子、万葉の歌を本歌として詠返歌也。拾遺恋二、万葉集和し侍りけるに順歌云々。散木上、鹿の声をきゝて俊重がよめる歌云々。これを和しける歌云々。同中、かわらけとりてよめる歌云々。修理大夫行宗和せられたりしかどもわすれにけり。（『増補語林　倭訓栞』）

わす　和す　万葉に和しける時、其歌の返歌をよむなり。又相対したる時のもそれにむかへてよめれば返歌の如し。同じ心をよめるとは異なり、詩にもしかいへり。（袋草子）云、万葉の歌を本歌として詠返歌なり。〔拾、恋二〕万葉集和し侍りけるに順歌云々。〔散木、上、五十一〕鹿の声をきゝて俊重がよめる歌云々。これを和し侍りける歌云々。〔同、中、六〕かはらけとりてよめる歌云々。修理大夫行宗和せられたりしかどもわすれにけり。（『増補　雅言集覧』）

これら、『倭訓栞』『雅言集覧』は、「ワス」の意味を、「返歌を詠むこと（詩の場合も含む）」という意味であるとしている。これは、先に掲げた、色葉字類抄や節用集の記述と相通じている。

三　国語文における「和ス」の意味用法

前節では、古辞書において「和ス」がどのように説明されているかをみてきた。ここでは、国語文のうち古典の文学作品において、「和ス」が実際にどのように使用されているかということについてみていく。まず、「和ス」の使用数を

作品ジャンル別に示すと次のようになる。尚、次に示す表は、「和ス」の用例が認められた作品のみを示したものである。表内の数字は、当該文献中に認められる「和ス」の用例数を示したもので、そのうち丸括弧に入れて示した数字は、例えば活用部分が記されていないために、サ変動詞なのか和語動詞なのか判断できないものなどの用例数を表している。

以上、国語文における「和ス」の用例を作品ジャンル別に示したが、全体を通してもその使用数は極めて少ないといってよいであろう。平安時代の物語においては、『源氏物語』に一例認められるのみであるが、その一例にしても、次に示すように、光源氏が口ずさむ漢詩[3]のなかで使用されたものであり、作者の創作した文章中の使用例ではない。従って、平安時代の物語においては、その使用例が全く認められないといってもよいであろう。

	作品名	用例数
物語	源氏物語	1
	注好撰	2（1）
説話	今昔物語集	3
	十訓抄	1
	古今著聞集	2
	沙石集	1

	作品名	用例数
	お伽草子	
	秋夜長物語	1
	若みどり	2
	羅生門	1

	作品名	用例数
	歴史物語	
	今鏡	2
	講式	
	随心院蔵仮名書き往生講式	1

あめのうちふりたるなごりのいとものしめやかなるゆふつかた御まへのわかゝえでかしわきなどのあをやかにしげりあひたるがなにとなく心ちよげなるそらをみいだし給ひてわしてまたきよしとうちずし給うて（源氏物語大成795・8　胡蝶）

このように、平安時代の物語には、「和ス」が使用されていないといってもよい状況であることから、このころ和文を

書き記すうえでの用語としては、「和ス」という漢語サ変動詞は未だ馴染んでいなかったものと思われる。「和ス」の用例が認められるようになるのは、管見に入った限りでは、院政期頃成立の『今昔物語集』あたりからで、作品ジャンルとしては説話ということになる。『今昔物語集』をはじめとする説話の文体は、漢文の影響を受けているといわれており、恐らくは、このことが「和ス」の使用と深く関わっているのであろう。

さて、次に、国語文における「和ス」の意味用法について検討する。以下、私に意味別に分類して用例を示しておくこととする。（紙面の都合上、それぞれの意味につき、代表的な用例のみを掲げることとする。）

（1）「混じり合う・混ぜ合わせる」　計3例

①昔、迦葉佛ノ時ニ一ノ老女有キ、諸ノ香ヲ以テ油ニ和シテ、行テ塔ニ塗キ。（『今昔物語集』巻第二、第三十話、大系180頁9行目）

②此レ、則、国ノ大夫人、韋提希、竊ニ麨ヲ蘇蜜ニ和シテ其御身ニ塗リ、瓔珞ノ中ニ漿ヲ盛テ蜜ニ奉リ給フ。（『今昔物語集』巻第三、第二十七話、大系249頁16行目）

（2）「調和する」　計6例

③四気和セルヲ之ヲ玉燭ト謂フ（金剛寺蔵『注好撰』二丁裏5行目）

④四気和セルヲ通（シテ）之ヲ景（平声）風（去声）ト謂フ。（金剛寺蔵『注好撰』二丁裏6行目）

（3）「なごむ」　計1例

⑤舞曲ノ宴アツテ、新羅大明神誠ニ興ニ和シテ歓喜ノ笑ヲ含（ミ）給フ。（『秋夜長物語』　大系482頁12行目）

（4）「（和歌・漢詩などに）相応じる」　計5例

⑥このをとゞうせさせ給ほどちかくなりて、法性寺殿、かつらどのなど、ごらむじめぐらせ給て、処〳〵のありさまを、さま〴〵のふみどもつくらせ給て、もりみつ、これとしなどいふ学生どもにたまひて、わしてたてまつり、

判ぜさせなどせさせ給へり。（『今鏡』きくのつゆ　129頁14行目）

⑦二　邑上帝カクレサセ給テ後、枇杷大納言延光卿朝夕、恋忍ヒ奉テ、御カタミノ色ヲ一生ヌキ給ハサリケリ。

或夜ノ夢ニ、御製給ハラセケル。

月輪日本雖相別　温意清涼昔至誠

兜率最高帰内院。如今於彼語卿名。

大納言夢覚テ驚テ、是ヲ和シ奉ル。

再拝聖願一寝程　思言芳處奏中情

夢中如覚夢中事　雖尽一生豈早驚セシヤ（『十訓抄』巻五　147・2）

⑧大納言夢さめておどろきてこれに和したてまつる。（『古今著聞集』巻四、77頁15行目）

以上示したように、国語文で使用される「和ス」には、「混じり合う・混ぜ合わせる」「調和する」「なごむ」「（和歌・漢詩などに）相応じる」といった意味が存し、一義とはいえない状況である。このような状況を呈するのは、「和」という漢字の意味に本来多くの意味が存したことによるものであろう。(4)

さて、これら四つの意味の「和ス」が、それぞれどのような文献に使用されているかということをみると、「混じり合う・混ぜ合わせる」という意味の「和ス」は、『今昔物語集』のうち、いずれも天竺部や震旦部に属する部分、つまり仏教に関する説話のなかで用いられている。こうみると、「混じり合う・混ぜ合わせる」という意味の「和ス」の使い方は仏典の影響下にあるとも考えられそうである。

次に、「（和歌や漢詩などに）相応じる」意の「和ス」についてであるが、この用例は『今鏡』といった歴史物語や『十訓抄』『古今著聞集』といった説話などに広く認められる。この点では、本邦の国語文における中心的な用法であるともいえようか。このことは、先に本邦の各古辞書において、「和ス」の意味として、「声相応也」と記されていたこととも

関連がありそうである。

さて、次に国語文を対象にして、「和ス」の読みと意味との関係について考えてみたい。尤も、先に掲げた用例からも分かるように、国語文において「和ス」の読みが分かる例は極めて少ないので、以下、そのわずかな用例を手がかりとして、読みと意味との関係についてみていくことにしたい。

「ワス」の例としては、随心院蔵『仮名書き往生講式』に一例、『今鏡』に二例、「クワス」の例としては、『平家物語』に一例、仁和寺蔵『後鳥羽天皇御作無常講式』に一例存する。意味は、「ワス」が、『仮名書き往生講式』の一例、『今鏡』の二例いずれも、「(和歌や漢詩などに)相応じる」という意味であり、一方、「クワス」は、いずれも「調和する」という意味である。結果として、「(和歌や漢詩などに)相応じる」の意では「ワス」、「調和する」の意では「クワス」となる。先に述べたように、古辞書で、「ワス」の方のみが掲載され、それに「声相応也」といった意味が記されていたが、国語文で「ワス」が全て「(和歌や漢詩などに)相応じる」という意味であることと、通底しているように思われる。これに対して「クワス」の方は、『平家物語』の例が願文という仏教的色彩の強い文章の中で使用されたものであり、仁和寺蔵『後鳥羽天皇御作無常講式』の例についても、白楽天のことを述べた箇所で使用されているところをみると、漢詩や仏典などといった外来の文章を踏まえた文脈の中で使用されているとみることもできようかと思う。

四　漢文(訓点資料)における「和ス」の意味用法

ここでは、訓点資料における「和ス」について検討する。まず、訓点資料における「和ス」の用例数を資料ごとに表にまとめて示す。

文献名	用例数
西大寺本金光明最勝王経(平安初期)	1
聖語蔵御本唐写大乗阿毘達磨雑集論(平安初期)	0
山田嘉造氏蔵妙法蓮華経方便品平安初期点	0
東大寺図書館蔵本金光明最勝王経註釈(平安初期)	0
東大寺図書館蔵成実論天長点巻十二・巻二十一	0
大唐三蔵玄奘法師表啓(天安から元慶)	0
龍蔵寺蔵蘇悉地羯羅供養法角筆点(平安中期)	(2)
高山寺蔵十二天法平安中期点	0
聖語蔵辨中邊論天暦点	0
天理図書館蔵妙法蓮華経巻四(藤原時代)	0
南海寄帰内法伝(平安時代後期)	4
高野山西南院蔵蘇悉地羯羅経巻上平安後期加点	10
大東急記念文庫本大日経義釈　巻十三延久頃点	0
仁和寺蔵本蘇磨呼童子請問経承暦三年点	5
東京大学史料編纂所本大乗理趣六波羅蜜経古点(永保三年)	0
西教寺本秘蔵宝鑰(院政期～鎌倉初期)	1(1)
東大国語研究室蔵不空羂索神呪心経承徳三年点	2(4)

文献名	用例数
東大国語研究室蔵恵果和上之碑文古点(平安初期)	0
唐招提寺本金光明最勝王経(平安初期)	0
石山寺蔵佛説太子須陀拏経(平安初期)	(1)
小川本願経四分律古点　弘仁～天長点	0
興福寺本大唐西域記巻十二承和十二年点	0
地蔵十輪経(元慶七年)	1
東大寺図書館蔵無上依経古点(平安中期)	0
随心院蔵無畏三蔵禅要平安中期角筆点	0
法華経玄賛(天暦四年)	0
龍光院蔵妙法蓮華経(平安後期)	0
東大寺図書館蔵法華文句巻第二　平安後期点	0
西大寺蔵本護摩蜜記長元八年点	2
高山寺蔵恵果和尚之碑文古点(延久・承暦)	0
高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏(永保二年)	6
高山寺本三教指帰巻中院政初期点	1
随心院蔵源信撰述普賢講作法院政期加点	0
興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝(承徳三年)	(1)

神田本白氏文集(天永四年)	4	高山寺蔵本大毘盧遮那経疏巻第三　康和五年点	0
東大寺図書館蔵極楽有意(保延元年)	1	東大寺図書館蔵新修浄土往生伝(保元三年)	1
大唐西域記(長寛元年)	(2)	高山寺蔵文鏡秘府論	2
西南院蔵和泉往来　文治二年点	0	猿投本古文孝経　建久六年点	0
仁和寺宝蔵三教指帰古点(鎌倉初期点)	0	東京大学史料編纂所蔵南无阿弥陀作善集(鎌倉初期)	0
東大寺図書館本釈摩訶衍論　承元二年点	0	高山寺蔵史記	1
仁治本古文孝経　仁治二年点	0	仁和寺蔵後鳥羽天皇無常講式(建長元年)	1
仁和寺蔵後鳥羽天皇御作無常講式建長元年点	0	真福寺蔵八名普蜜陀羅尼経鎌倉中期点	0
文永本論語集解巻第八	1	猿投神社蔵文選序文永三年頃点	0
建治本古文孝経　建治三年点	0	弘安本古文孝経	0
猿投神社蔵正安本文選	0	仁和寺蔵秦中吟延慶二年書写加点本	0
百舌往来(室町時代)	0	大英図書館所蔵毛詩鄭箋巻第一　室町時代末加点	0

(注)丸括弧で示した用例数は、語尾の「ス」が付訓されていない等の理由で、読み方が判断できないものである。

さて、ここで、訓点資料中の「和ス」を、意味により分類すると次のようになる。尚、「和」の字義は、先にも示したように多義であり、一つ一つの意味に共通する部分も多いことから、それらをひとつひとつ分類することは難しい点もあるが、以下は、敢えてそれを私に分類したものである。

(1)「おだやかになる」　計三例

①法曲々々(ハフキヨク)、「ケ」(角)(イ)霓(平声濁)【イ、「ケイ」】裳(シヤウ)(平声)を舞フ(マ)、政(マツリコト)(訓、角)(訓)和シ(クワ)、世(ヨ)(訓、角)(訓)、ヲ(サマ)理

て音（コエ）（訓）洋（ヤウ）（平声）（ヤウ）々たり。（神田本白氏文集巻第三、68行目）

②箋云、妃-妾、礼-義を以（て）相-與（トモ）に和す（音読符）。又、能（く）礼-楽を以（て）其（の）君-子を楽（タノ）シム。（大英図書館蔵毛詩鄭箋巻第一　104行目）

（2）「調和する」　計六例

③鼓（ツヅミ）（訓、角（訓））を撃（ウ）チ、笛（フエ）（訓、角）＼（訓）を【右、笙（サウ）を】吹（フ）（キ）て雑-戯（サワキ）（去声）に和（クワ）（去声）ス。（神田本白氏文集巻第三、106行目）

④蓋タシ均シ（キ）ときは貧（スル）こと無シ。和（平声）するときは寡（キ）こと無（シ）。（文永本論語集解第八　128行目）

（3）「混ぜる」「混じる」　計三十四例

⑤前の香秣を用（ゐ）て［以］湯に和して亦復［於］壇の内に安在セヨ。（西大寺本金光明最勝王経古点　巻第七　大弁財天女品第十五　131頁15行目）

⑥若（し）佛に献せむには・当に雑（クサクサ）（の）-好ナキ麝金と或（い）は黒沈（チム）（墨平声）香とを用て和するに龍脳を以（てせ）よ。（高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏巻第七　798行目）

（4）「唱和する」　計二例

⑦道場ノ時ヰ毎に、康（人名）自（ラ）座に登（リ）て男女を令て康（人名）に面フて声ヲ賽（ツ）イテ【イ、て】高ク阿弥陀仏を唱（へ）シム。已（リ）テ又声を賽（キ）て之ヲ和ス。（東大寺図書館蔵新修浄土往生伝十八丁裏　8行目）

⑧［於］焉（ここ）に「・」釈の経は妙にして［而］入（り）（反）難「ク」李（去声）か篇（平声軽）は玄（平声）にして［而］和（平声）（音）スルコトすること寡（スクナ）シ。（高山寺蔵文鏡秘府論二丁表　17行目）

以上、「和ス」を意味により四つに分類したが、そのうち最も用例数が多いのは「混ぜる」「混じる」の意味で使用さ

れた「和ス」（三十四例）である。全ての文献について検索したわけでもなく、またもとより残存する文献による検索なので、用例数の多寡にさほどの意味はないのかもしれないが、この「混ぜる」「混じる」という意味で使用された「和ス」が、『金光明最勝王経』や『大毘盧遮那成仏経疏』『南海寄帰内法伝』といった仏典および仏教色の強い訓点資料に偏って認められることは、特徴として挙げてよいであろう。ここで、考えてみたいのは、『名語記』に書かれた次のような記述である。

問　クスリナト合薬スルヲワストイヘリ如何。　答　ワスハ和ス也　和ハヤハラクナレハヤハラケアハスルヲイヘル也

（巻第四　8丁表）

これは、合薬することを「ワス」といい、それが「和ス」のことであるということを指摘したものである。ここでの「和ス」は、「混ぜる」という意味から生じたものと思われる。国語文において「和ス」が「混ぜる」という意味で使用された例は『今昔物語集』にも認められる。因みに、そこでは、「諸々の香を油に」「麨を蘇蜜に」「水を泥に」それぞれ混ぜ合わせることを表していたのであるが、「ある薬をある薬に」混ぜ合わせるということから「合薬する」という意味が生じたものとみられる。「混ぜる」という意味の「和ス」は、先に述べたように『金光明最勝王経』や『大毘盧遮那成仏経疏』『南海寄帰内法伝』といった仏典および仏教関係資料に偏って認められることから、「和ス」のこのような意味は仏典の類を出自とするのではないかと思われる。

次に、「和ス」を「ワス」と呉音読みにしたか「クワス」と漢音読みにしたかという問題について触れておきたい。このことは、意味の差異によって読みの選択が行われたかどうかということと関わってくる重要な問題なのではあるが、ただ、残念ながら現段階で検索し得ている用例からは俄には判じがたいといわざるを得ない。読みを付している用例がほとんどないことがその原因である。「和ス」をどのように読むかは、恐らくは当該資料が漢音読を基調にしているか、呉音読を基調にしているかということとも関わってきて、一概に論ずることはできないであろう。そこで、漢音読と呉

音読とが併用されている文献が求められることになるのであるが、このような資料も多くを検索し得ていない現状である。このような条件に合う、数少ない資料の中から、久遠寺蔵『本朝文粋』を取り上げて、次節において考察したいと思う。

五　久遠寺蔵『本朝文粋』における「和」字の訓読

久遠寺蔵『本朝文粋』は、建治二年（一二七六）に書写されたものである。本資料には、「和」字が動詞として使われたものが二十二例認められる。それらの「和」字がどのように訓まれているかということについて、その内訳を示せば、次のようである。

1　「クワス」と読まれたもの　2例　　2　「ワス」と読まれたもの　11例

3　漢語サ変動詞として読まれているが「クワス」「ワス」いずれかということが不明のもの

　ア　音読符の付されたもの　2例　　イ　声点が付されたもの　2例

4　和語動詞「ヤハラグ」に読まれたもの　5例

ここで、自動詞「和ス」と自動詞「ヤハラグ」の主体、他動詞「和ス」と他動詞「ヤハラグ」の対象をそれぞれ表にまとめ、比較しておくことにする。自動詞の場合は主体、すなわち何が「和ス」「ヤハラグ」のか、他動詞の場合は対象、何を「和ス」「ヤハラグ」のかということが、それぞれの「和ス」の意味を考える上で最も有効であると考えて、このような分析を行うこととした。（本来ならば、個々の例について用例を掲げ、説明を加えておきたいところであるが、紙面の都合によりその部分を割愛させていただく。）

次の表は、上段に漢語サ変動詞「和ス」について示し、下段に和語動詞「ヤハラグ」について示したものである。「和ス」は自動詞と他動詞に分けて示し、自動詞は主体を他動詞は対象を示している。一方、和語動詞「ヤハラグ」も自動

詞（四段活用）と他動詞（下二段活用）に分けて示し、それぞれ主体と対象を示している。上段と下段とは、同種の主体、対象と考えられるものであれば上下に対応させている。従って、上段のみで下段の無い部分、逆に下段のみで上段の無い部分は、それぞれ同種の主体、対象が存しないということを表している。

左の表をもとに、「和」字に対して、漢語サ変動詞と和語動詞とに読み分けられていたかどうかということについて考えてみたい。

「和ス」・自動詞の主体	「ヤハラグ」・自動詞の主体	「和ス」・他動詞の対象	「ヤハラグ」・他動詞の対象
クワス		ワス	
節候（一例）	陰陽（二例）	羹（二例）	
人間（一例）	顔色（一例）	味（二例）	
ワス		灯篭の火（一例）	
詠歌（一例）			人（一例）
声（一例）			夫婦（一例）
琴（一例）			天（一例）
夜露（一例）			

まず、自動詞「和ス」と自動詞「ヤハラグ」についてであるが、その主体を比較すると、「和ス」は、六例中四例が、「詠歌」「声」「琴」「夜霜」といったような音に関するものである。尚、「夜霜」そのものは音とは無関係のようであるが、本文中に「韻-高シ」のように夜霜と鐘の音の響き合いが述べられており、音に関するものとした。注目すべきことは、これらの例が、「ワス」（自動詞）と読まれた全用例に当たるということである。残りの二例は「節候」という季節に

関するもの、「人間」という人倫に関するものが主語であり、これらは、「クワス」（自動詞）と読まれている。従って、「ワス」と「クワス」とでは、主語の種類が異なっているといえよう。一方、和語動詞の自動詞「ヤハラグ」は、「陰陽」という季節に関するもの、「顔色」という人倫に関するものが主体となっており、「クワス」との共通点が認められる。

次に、他動詞「和ス」と他動詞「ヤハラグ」について考える。尚、他動詞の「和ス」は全て「ワス」と読まれ、「クワス」と読まれたものはない。他動詞「ワス」の修飾語は、「羹」「味」といった食に関するものが五例中四例、「灯籠の火」といった照明に関するものが五例中一例である。一方、他動詞「ヤハラグ」の主体は、「人」「夫婦」といった人倫に関するものが三例中二例、「天」といった自然に関するものが残りの一例である。

これらの結果から、本資料における「和ス」と「ヤハラグ」との関係をまとめると、次のようになろう。まず、結論からいえば、「和」をサ変動詞に読むか和語動詞に読むかということには、緩やかではあるが基準が存するようである。その基準とはどのようなことかというと、音に関するものが主体となる場合には「ワス」の自動詞に、食に関するものが対象となる場合には「ワス」の他動詞に読むということのようである。

本邦の古辞書の記述によれば、「和」は「ワス」と訓み、意味は「声相応也」ということであった。本邦の国語文に使用されている「ワス」をみても、殆どがこの意味で使用されていた。また、名語記には、「ワス」の説明として「クスリナト合薬スルヲワストイヘリ」ともあった。これらの記述と、『本朝文粋』で音に関する主体や食に関する対象を「ワス」と読んでいることとは通底しているようである。すなわち、「和ス」は「ワス」として国語文に導入され、「声が相応する」（音に関すること）「薬を混ぜて調合する」（食に関すること）といった意味で使用されていたことを背景にして、本資料では音や食に関するものが主体や対象となる場合には「クワス」ではなく「ワス」を選択したものと推定できようかと思う。ただし、先に、サ変動詞と和語動詞の読み分けは緩やかであると述べたように、人倫や季節に関するものが主体となる場合には、サ変動詞「クワス」に読むのであるが、その場合、和語動詞「ヤハラグ」との読み分けは行われ

ていないようである。この現象をどう考えればよいのか今のところ明確な答えを見いだせないが、和化漢文である本資料には、少なくとも二種類の「和」が存するようである。その一は、「声相応也」「混ぜ合わせる」の意の、いわば和化した「和」であり、その二は、中国の用法の影響下で使用された「和」である。そして、前者は「ワス」という読みで一貫しており、後者は「クワス」「ヤハラグ」が混じり合っているように思われる。

六　おわりに

今回の考察から、複数存する「和ス」の意味の中で、「詩や和歌に相応じる」と「薬などを混ぜる」という二つの意味が我が国において古くから受け入れられていたということが分かった。また、「和ス」のうち、「ワス」のほうが和化しているのに対し、「クワス」が本邦の作品に用いられるときは漢籍を踏まえたようなところに限られる傾向にあると考えられた。このような「ワス」の和化は、恐らくは「訓点資料」における訓読のなかで、徐々に深化してきたものであろうと推測される。特に、経典などの訓読が、「ワス」の和化に与えた影響は少なくないであろう。今後、近世等の作品も含めて、より多くの用例の採取に努め、「和ス」の和化過程について深く検討していきたい。

注

(1)「方字の合音用法」(『漢語研究の構想』　池上禎造著　岩波書店　一九八四年)
「否定辞『無』を冠する漢語の音と意味――『無礼』の音の変遷をめぐって――」(来田隆　『鎌倉時代語研究』第四輯　昭和五十六年五月三十日発行)

(2)『日本国語大辞典』(小学館)を参考に挙げれば、「ワス」「クワス」にはそれぞれ次のような意味が掲載されている。
○見出し語が「ワス」として

（自動詞）①天候など、物事の状態がおだやかになる。②仲睦まじくする。③二つの物事が調和して一つになる。④ある音響や調子が他の音響や調子と調和する。⑤他の動作、特に歌などに相応じる。答える。

（他動詞）①おだやかにさせる。やわらげる。②仲よくさせる。睦まじくさせる。③二つの物事を一つに調和させる。④他の漢詩の題に合わせて、漢詩を作る。⑤外国語の表現を日本語に改める。和訳する。また、訓読する。⑥音響や調子に他の音響や調子を調和させる。

○見出し語が「クワス」として

（自動詞）①心が和らぐ。②まじり合う。一緒に解け合う。調子が合う。和する。

（他動詞）①心を和らげる。互いの気持ちを和ませる。②混ぜ合わせる。一緒にする。

（3）当該箇所の漢詩は『白氏文集』第十九　「贈駕籠部呉郎中七兄」の冒頭部分を口ずさんだものである。

（4）『大漢和辞典』には、「和」字に対して次のような意味が挙げられている。（動詞に関わる意味のみを示す）

1声を合わせる。2やはらぐ。3かなふ。4あふ。5たひらか。6ひとしい。7おなじ。8したがふ。9おだやか。10あつまる。11やはらげる。12ひたす。13仲なほりする。14ゆるす。15とりかへる。16こゑを合はせる。17こたえる。18他人の韻を用ひて詩を作る。19応ずる。ととのふ。20まぜあはせる。

［検索文献について］

本来ならば、用例を検索した全ての文献名を明記しておくべきところであるが、紙面の都合上これを割愛する。国語文の検索は、索引のあるものはそれを活用し、索引のないものは日本古典文学大系（岩波書店）等を使用した。訓点資料の検索には、主に「訓点語と訓点資料」「鎌倉時代語研究」を使用した。尚、拙稿「平安・鎌倉時代に於ける『念ス』の意味・用法――「オモフ」と比較して――」（『国文学攷』第129号　平成三年三月）の資料一覧を合わせ参照していただければ幸いである。

［付記］本稿は、平成九年と平成十一年の鎌倉時代語研究会において発表させていただいたものをまとめたものである。席上、小林芳規先生をはじめ多くの方々から貴重な御助言を賜った。記して深謝申し上げる次第である。